

2019.3.17 「結婚とは（その2）」

「結婚とは（その2）」

2019年3月17日

先週、私は「結婚とは何か？」ということをお話ししたことがあるだろうかということをお話しし、皆さんに問いかけ、もし、夫婦共にこの問いに対してそれぞれが異なる思いがあるのなら、その違いはやがて実際の結婚生活のあちこちに現れてくることではないかとお話ししました。

そして聖書は「結婚とは創造の完成である」ということ、そして「夫と妻は一体となる」ということをお話ししました。もし、この前半を聞いていない方がおりましたら、ウェブサイトからお聞きになれますので、よかったら聞いてみてください。

今日はこれらのことに加えて、さらに三つのことをお話ししたいと思います。まず最初に「夫婦の間」ということです。

夫婦の間

結婚ということにつきまして「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである」（創世記2章24節）という創世記の言葉があります。この言葉の中に「それで人はその父と母を離れて」という言葉が記されていることに私は驚きます。

なぜなら、その時点でこの地球上にはまだ父も母も存在していなかったからです。そう、その時、この地球にはまだアダムとエバしかおらず、彼らは夫と妻であっても、まだ父、母とはなっていなかったからです。

しかし、神様はまだ存在していない父と母について語りました。このことは男と女が結ばれると子が与えられ、その時から二人は「夫」、「妻」という呼び名に加えて「父」、そして「母」と呼ばれるということが暗示されています。そして、その父と母の間に与えられた子達が成長しますと、やがて彼らも夫、妻となり、また父と母となるのです。

結婚生活で起きる課題について話していますとよく「親」のことがでてきます。特に最近では親の介護ということが私達の大きな関心となっています。また介護以外でも親が夫婦の間の話題となることがあります。

もし、既に結婚生活を始めているカップルのどちらかが、何か問題が起こる度に、パートナーと話し合う前に、毎日のように親に電話をかけて、父母からのアドバイスを聞いて、折に触れてそのことを自分が支持する意見として、パートナーに言っていたとしたらどうでしょうか。この夫婦はうまくいくのでしょうか。

親は大切です。かけがえのないものです。ですから神様はあの十戒の中に「あなたの父と母を敬え」という言葉を入れたのです。十戒の最初の四つは神と人間の関係について、残りは人と人の間の戒めです。そのトップにこの言葉はきています。

ですから親の介護や親をサポートしなければならない時には、家族を置いてでもそれに没頭しなければならないこともありますでしょう。なぜなら、それが十戒に従うということだからです。しかし、同時に聖書は親が夫婦の間に入ってはいけないと私達に語りかけます。このことは夫婦は一体であり、そこに親が含まれるべきではないということです。

さらに、この箇所についてももう少し解釈を広げますならば、親も、そして子をも、夫婦の間に入れてはいけないのです。それは、排除せよということではありません。この言葉は私達が第一にすべきことは夫婦の関係なのだということを語りかけます。なぜ？

「夫婦は一体なのだ」と聖書は書いておりますが、「親と子が一体だ」とは聖書は言っていないからです。

よく聞きします。「子供のためなら何でもできるけど、あの人のためにはねー」。その目線の先には誰がいるのですか。その先には夫がいます。この言葉を子供が聞きます。もしかしたら、その子はその言葉を喜ぶかもしれません。なぜなら自分が誰よりも大切にされていると思うからです。しかし、このような時、本来あるべき家庭の礎（いしづえ）が一つ、外されてしまったことを私達は知らなければなりません。

子供が家庭で一番、見たい光景は何でしょうか。ドレッシャーという人が「自分がもう一度、父親をやり直すことができるとしたら、あれをしたい、これをしたい」ということを10の項目で書いています。そこには「もっと子供と笑い合う時をもつ」とか「もっと子供との時間をもつ」というようなことが挙げられています。その中で彼がまず第一番目としてあげていることは「妻をもっと愛すること」なのです。

すなわち子供が家庭で一番、観たい光景は父と母が仲良くしている姿なのです。父母はそこがぎくしゃくすると他のもので子供を喜ばせようとします。欲しいものを買って与えます。子供ですから、それを喜ぶでしょう。しかし、その度に本来あるべき家庭の礎がここでも一つ、外されていくのです。

なぜなら、子供が本当に望んでいることはおもちゃではないからです。それはテンポラリーなものです。彼らに必要なのは父母が信頼し合っている、愛し合っている姿なのです。それを見る時に子供は満たされ、安心するのです。

二つ目の事をお話しします。それは「大切な役目を担うもの」ということです。

大切な役目を担うもの

2019.3.17 「結婚とは（その2）」

夫婦になるということは、もし主の恵みであるならば、子供を神様から授かる可能性が与えられるということです。すなわち神様から命のバトンが託され、その夫婦にはそのバトンを次の世代へ受け継いでいく使命が与えられます。しかし、このバトンを授かったもの、夫婦には色々な課題が日々、起こります。

創世記3章11節—12節にはこう書かれています。「神は言われた、あなたが裸であるのを、誰が知らせたのか。食べるなど、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか。人は答えた、わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」。

このところでアダムは「なぜ、禁じておいた実をあなたは食べてしまったのか」という神様からの問いに対して、自分の妻、エバに責任を転嫁しました。潔く自分の否を認めずに、それを妻のせいにした夫。この後、この夫婦の関係がぎくしゃくしたであろうことを私達は容易に想像できます。聖書はそのことを詳しく書いていませんが、この二人から生まれた子供、兄カインは弟アベルを創世記4章において殺害しているのです。

牧師として色々な人の問題を聴かせていただくことがあります。そして、そのほとんどの問題は人間関係の問題です。家の木が伸びすぎてしまったり、釣りに行っても魚が釣れないということに悩んで、牧師を訪ねてくる人はほとんどいません。

エデンの園に当初一人、置かれたアダムに対して神様は「人が一人でいるのはよくない」と言われました。確かに私達は互いに関係をもつべく、この地に置かれています。そして、それは私達の喜びであり、生きがいとなりうるものです。しかし、その祝福の関係が私達の最大の問題となるのです。

先週もお話ししました、結婚が創造の秩序の中にあるのならば、夫婦の間にも秩序があります。しかし、その秩序が壊れてしまうと、すなわち月と太陽のバランスが崩れたら、地球環境に大きな影響があるように、夫婦のあるべき関係が崩れると、その影響は子供におよんでいきます。そして、この連鎖は世代から世代へとつながっていくことが多いのです。

皆さん、このようなことを聞き、真実に自分の心に手を置いて考えますと、この負の連鎖というものが自身の内にあることを見いだします。どこに完璧な夫婦がいるでしょうか、どこに完璧な親がいますか。どこに完璧な男が、女がいますでしょうか。

こんな、私達はどうしたらいいのでしょうか。聖書はこれらの連鎖を解く光を私達に提示しているのです。

すなわち、この悪循環の連鎖はイエス・キリストにある救いによって解くことが可能なのです。夫も妻も親も子も皆、神の前には罪人。多くの過ちを犯し、そして、その自分

の過ちにも気がつかずに、いつまでも人のせいにして、どうにか自分の正当性を保ちながら生きているようなお互い。

しかし、そんな私達がキリストの前に立つならば、私達の心が照らされるのです。そして、私達は自分がそれまで歩んできた道を方向転換して、キリストと共に歩み出すのです。そのことによって私達は変えられていくのです。

この私の傷が子供にも引き継がれていく、その鎖を断ち切り、その鎖の代わりにキリストの十字架をそこに据えることができる時に、そこに本当の命の連鎖ができていくのです。

十字架は縦木と横木でできています。縦木は私達と神様との関係です。横木は私達の互いの関係です。もしかしたら、この関係が途切れてしまっている方がいるかもしれません。その途切れてしまった破れ口に、この横木を置く時に、その関係がまた修復されていきます。

人を創造し、夫婦を創造の秩序に組み込まれた神様は互いの関係が壊されてしまった者に対して、見て見ぬふりをしているわけではありません。そんな私達のために神様は既にキリストをこの地に送り、私達の連鎖の鎖を修復できるようにしてくださっているのです。もし、その破れ口の存在に自ら気がついておりましたら、主イエスのもとに行きましょう。

それでは最後のことです。「夫と妻を引き上げること」についてお話ししましょう。

夫と妻を引き上げること

パウロは生涯、世帯を持つことなく、宣教に没頭しました。先週、お話ししましたように世帯を持つ時に、その時間の多くが家庭に注がれていきますが、その全てを彼は宣教に向けたのです。

その彼はエペソ書5章において「妻たる者よ」「夫たる者よ」と夫婦が互いにどうあるべきかを語りかけて、その一番最後にこんな言葉をもって結論を書いています。

『いずれにしても、あなたがたは、それぞれ、自分の妻を自分自身のように愛しなさい。妻もまた夫を敬いなさい』（エペソ5章33節）

このことは常々、お話ししていることなのですが、この一文に夫婦の関係において私達がフォーカスすべきことが書かれています。夫婦に関する書物は無数にあります。色々なことが書かれています。そして、それは時代と共に言っている内容が変わります。そうでしょう、50年前に日本で出版された夫婦に関する書物と、今年、出版される書物

とでは、その内容は異なりますでしょう。「妻は夫よりも数歩、後を歩きなさい」なんてことを言ったら、今、私達は法廷に呼び出されるでしょう。

パウロがここで書いていることは2000年前に書かれたものです。しかし、この言葉は今日も十分に適応できる言葉として私達の前にあります。そうです、パウロは夫に対して言いました「自分の妻を自分自身のように愛みなさい」。そして妻に対しては「夫を敬みなさい」。

男は女よりも先に神に造られたということは先週、お話ししたとおりです。そう、女は男のあばら骨、そのサイドから作られたのです。この夫婦が一体となるということは、そのサイドが夫のもとに戻ってくることです。

すなわちパウロは言っています『それと同じく、夫も自分の妻を、自分のからだのように愛さねばならない。自分の妻を愛する者は、自分自身を愛するのである』（エペソ5章28節）

そうです、かつては自分のからだであった一部から妻が造られ、その二人が結ばれ一体となったのですから、その妻を愛することは自分を愛することなのです。

先日、車を運転しながらラジオを聞いていましたら銀行の重役には、まだまだ女性が少ないということがディスカッションされていました。そして、もし重要なことを取り決める会議で、女性の意見がもっと取り入れられ、それが反映されていくのなら、銀行がなす融資や投資ということに対して、大きな損失がなくなるだろうということです。

同じことが戦争ということにも当てはまるかもしれません。もし女性が国のトップに立っていたら、私達の過去の歴史におきた戦争の数は少なかっただろうと聞いたことがあります。

男の子のおもちゃはいつも銃や剣です（わたしもそうでした）。男は戦うことが好きなのです。男の子の遊びにはいつも「戦いごっこ」がありますでしょう。そこには「パワー」と「勝ち負け」があります。

でも女の子にはあまりその傾向はありません。やはり「絵をかいたり、お人形さんと一緒」ということが今でも定番でしょう。そう、そこには「平和」と「安定」があります。

男は大きなこと、勇ましく思えることを追いかけます。フットボール・ファンは圧倒的に男性が多いでしょう。フィギュアスケート・ファンは圧倒的に女性が多いでしょう。私が羽生君の追っかけをしていたら皆さん、引きますでしょう。このことは女性は優雅なこと、調和のとれたこと、包まれること、安心すること、すなわち愛されることを望んでいるということのあらわれではないでしょうか。

しかし、男は勇ましくありたい、勝ちたい、大きくなりたい、力を得たい、結果を残したいと思います。そんな男にとって彼らが生きるために必要なのは、そんな男をリスペクトしてくれる存在なのです。

男はリスペクトをエネルギーとして生きているのです。でも社会においてリスペクトを得られる男は限られています。社会ではその人が持っている能力が評価されますから。ですから、そのリスペクトを男は家庭に期待するのです。

しかし、男達は家庭でもほとんど評価され、リスペクトされることはありません。この場合の評価とはしっかりと言葉や態度であらわされる評価です。「言わずとも分かっているわよね」という類のものではないのです。

「あちらの御主人は出世したそうよ」というようなこと、それは男が一番、傷つく言葉です。このようなことが日常的に続きますと、男は家庭の外に慰めを、すなわちお世辞でもいいから自分を評価してくれる場所を外の世界に求めます。この世にはお金さえ払えば、いくらでもお世辞を言ってくれる人達がたくさんいるのですから。

このことは「なぜ、そうなの」というような質問で答えられることではなく、あえて申し上げますのなら、私達はそのように造られているとしか言いようがないことなのです。

さて、ここまでお話ししてきた、既に皆さんのお心にあることは「そうは言っても」ということかと思えます。実際に相手を愛すること、相手をリスペクトすることの難しさです。なぜなら、このことは私達のプライド、すなわち私達の自我に関わってくるからです、一筋縄ではいきません。どうして自分を敬うことのない彼女を愛することが出来ましょう。なぜ、愛されていないのに、彼を敬うことが出来ます。

そこで、一つ提案です。それは男性に対する提案です。なぜなら私自身も男でありますから、このことは自分に対するチャレンジでもあります。

私達が見ている『いずれにしても、あなたがたは、それぞれ、自分の妻を自分自身のよように愛しなさい。妻もまた夫を敬いなさい』（エペソ5章33節）という言葉において、私達、男に対する勧めが最初に来ているのですから、このことに対して私達、男から動き出しましょうという提案です。

先に聖書から引用したように、私達の愛は妻に対するものであると同時に、そのことは自分を愛することでもあるというアドバンテージも我々にはあるのですから。

さらに、私達は「無条件の愛」という言葉をよく使いますが、「無条件の尊敬」という言葉は聞くことがないということを知りましょう。ある方が言いました。それは私達、

男にとりましてはチャレンジングな言葉です。そう、それは「リスペクトは自分で勝ち取るものだ」ということです。

男としてこれは私達に与えられている大きなチャレンジです。しかし、私達が大好きな「強い男」というのは実のところ、筋肉の多さを言うのではなくて、一人の人を愛し通すことができるかということにおいて本来、測られるのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。やりがいのあるチャレンジではありませんか。

きっと女性の方々にも「夫を敬う」ということにおいて、チャレンジがあるかと思えます（いいえ、きっとではなく、必ずあることでしょう）。男が歩み寄るように、皆さんもキリストの光に照らし合わせて、このことを深く考えてみてください。男とは明らかに自分とは違うというところから始めてみてください。彼が何を喜ぶのか、そのことを考えてみてください。そのポイントに皆さんの思いが注がれるのなら、男はますます皆さんを愛おしく思うことでしょう。

夫婦円満とはすなわち、この古の書に書かれている「妻を愛し、夫を敬う」というこのシンプルな関係が保たれている状態のことを言うと私は信じる者です。

多くの人にとりまして「結婚」とはその人生にとって、大きな意味をもつものでしょう。その結婚について聖書が語ることの断片を、この度は二回に分けて聖書からお話しました。もしかしたら、今までこんな話し聞いたことがなかったという人もいるかもしれません。私の結婚観はいつも週刊誌の中にありましたという方いるかもしれません。

一週間の話題を提供する「週刊誌」と何千年も人類の評価に应运してきた「バイブル」を並べてみて、どちらに生きるかということを考えてみてください。

もし、この度、お話ししました聖書が言うところの結婚ということについて、深くうなづけるという方がおりましたら、ぜひ、それに心を向けて、実際にそれを試してみてください。試してみますと、さらなる困難があると思います。それは自分の心が深く探られるという困難です。その時にはまた別の聖書からのアドバイスがあります。このようにして私達がこの課題に取り組んでいく時に、私達は気がつくのです。私は昨日の自分ではなく、新しい自分に変えられてきていると。そして、その時、私達は自分のパートナーの中にも新しい変化を見出すのです。

そして、さらには聖書が言っていることは「結婚」だけではないということを知っていただけたらと願います。神は私達の誕生から死にいたるまで、私達の祝福を誰よりも願ひ、我々が歩むべき道筋を備えてくださっているお方です。ぜひ、この道筋を尋ね求め、それに従って歩んでください。この道を皆さんと切磋琢磨しながら、祈り励まし合って歩むことができること、それがこの教会に集う私達一人一人なのです。お祈りしましょう。